

ピアホームだより

2020. 9.10

看護実習受け入れを巡って

埼玉県立大学保健医療福祉学部看護学科から要請を受けて、看護実習を受け入れることになりました。

白石顧問医の勉強会「家族と専門家の交流会」で、専門家として当大学の横山先生と知りあったのはもう20年も前、その後、ご縁があって森田先生をご紹介頂き、当NPO法人の理事にお迎えしていました。

新型コロナの影響で実習の場も制限され、県外まで足を延ばされたとのこと。当方としてもお役に立てる機会を得て良かったです。

8月14日には説明会に来られました。久しぶりに大学の授業？—実習の目標や看護学、精神の分野での学問的アプローチの仕方など良い勉強になり、大いに刺激を受けました。

このご時世、授業はリモートで行うとのこと、ZOOMの設定やらならあたふたしているところ。講義は施設紹介をとのことでしたが、

先生方は、家族支援をテーマにしていっしょやることもあり、家族の立場から作業所を立ち上げた思いや経緯をお話する機会を得ました。当時の思いをまとめた資料も見つかり、改めて一部紙面に載せ、振り返ってみることにします。

家族が精神保健福祉事業に関わること

1 なぜ関わったか？

娘に起こっていること、病気を知りたいとの思い。

2 薬物療法への関わり

自身の仕事領域でもあったので、娘が病気となり関わるのは必然だった。

特に、遅発性ジストニアの副作用は病気以上に大変ショックを受け、医療機関での冷たい扱いなどを経験し、自分で調べて進めなくてはとの思いが強くなっていった。当初、薬物療法へのこだわりが強く、医師と頻繁な協議を重ねて来た。

結果、娘には拒薬などなく、治療の促進はあったとは思うが、医師の薬物療法にも口出しし悪い面も多分にあったと思う？

現在は、過度の薬物療法への期待から脱却し、リハビリへの関心の方が高い。

3 作業所立ち上げ—親亡き後の娘が生きて

行ける理想の空間探し

発病—高校復帰—短大入学、副作用に耐え切れず退学—の大きな転機を迎えた時、当時は、娘の病気の理解が浅く、なにがなんでも就労に向かわせたい思いが強くあり、現状の作業所に満足できなかった。

作業所に通所となったが、症状は重く、親の思いとは逆にきちんと通所できず、卒業という退所となった。

自分がなんとかできるとの思いが前面に出で、当事者を振り回してしまう。当初はそういうタイプの親だったと思う。しかし、私の場合、ネットワークや若干の専門性があり作業所を立ち上げることが出来た。

作業所を立ち上げたことで、とりあえず毎日通う場所が出来た。そして、他の利用者を見ることで、病気、障害の理解が深まった。

自分の娘を運営する作業所に通所させるということで公平性を保つことを心掛けましたが、

我が娘は1級という重度障害なので、ほかの作業所にきちんと通うだろうか？との思いは今も抱いています。

10月の予定

10月10日：症例検討会（白石先生）